

〈資料紹介〉 鈴木雨香『雨香文集』翻刻と注釈（上）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三浦, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/517

〈資料紹介〉

鈴木雨香『雨香文集』 翻刻と注釈（上）

三浦 一朗

はじめに

近世から近代にかけての三都以外の地方文化圏に関する研究の蓄積は、大名を中心とする各藩の学術や文芸をはじめ、国学、あるいは歌壇、俳壇などの分野で既に厚い。しかし、東北地方における士分以下の知識人の文業やその交流については、これまであまり明らかにされていないのではなからうか。もちろん、近世では安藤昌益や平田篤胤、建部綾足、明治以降では陸羯南など著名な文人、知識人もあり、彼らについて論じられる機会はあるが、言うまでもなく多いが、それは全体から言えばやはり例外的な事例であろう。少くとも近世から近代にかけての東北地方に生きた士分以下の知識人について、なお埋もれたままの存在が多いだろうことは確かである。

その主な原因として、彼らの漢詩文を中心とした作品や著述が多くは刊行されなかったために広くは知られず、写本として限られた範囲でしか読まれてこなかったことが挙げられよう。

詳細は不明ながら、こうした写本は近年に至るまで東北地方の旧家の古い蔵などに数多く眠っていたと推測される。しかし、先の東日本大震災で東北地方太平洋沿岸地域の旧家が激しい地震の揺れや津波の被害に遭い、所蔵資料の多くが所在不明となったり、大きく損傷したり、泥水に浸かって判読不能となったりした。各地域行政によってそうした資料の収集や調査、保存修復の作業が震災以前にも進められ、震災後も継続されていることはもちろんだが、人手も予算も恒常的に不足しているのが現状である。そもそも震災の影響の有無に拘わらず、建造物の老朽化に伴う解体と同時に、所蔵される貴重な作品や資料がそれとは明確に認識されないまま廃棄されるおそれは常にある。また、そうした状況への対応という意味に加え、埋もれていた地域の文化的遺産をより身近な地域の宝として次世代に引き継ぐことが、やや大仰に言えば、ひいては地域の方々の誇りとなつて復興を精神面で支えていくことにも繋がるといふ意味で、とりわけ東北地方における如上の資料の調査、収集、保存修復

および読解、研究の作業には大きな意義があるものと考えてる。

私は、現在携わる『岩沼市史』編纂の打ち合わせの過程で、仙台藩岩沼出身の知識人である鈴木雨香の存在を知った。雨香は嘉永六年（一八五三）生、昭和十四年（一九三九）没。本名省三。岩沼邑主古内氏に仕える医師だった父玄説の長男として生まれた。本人も医学を修め、調剤師、検疫官として活躍する一方、柴野栗山に師事して漢学をよくし、多くの漢詩文や碑銘を残した。ただし今日では彼自身の名よりも、彼が主任として編集に携わった『仙台叢書』（全十八巻、仙台叢書刊行会、一九二二―一九二六年）の方が、近世以前の仙台周辺について考える際に不可欠な資料として遙かに著名であろう。雨香は地元でも長く忘れられた存在だったと言つてよいが、近年、郷土史研究者である吉岡一男氏によって専著『鈴木雨香の生涯と岩沼』（鈴木雨香生誕一五〇年顕彰会、二〇〇三年）、『鈴木雨香の著作と岩沼』（南北社、二〇一〇年）が立て続けに刊行され、郷土史研究の偉大な先人として再びその存在が知られるようになった。吉岡氏の二著は資料調査とそれに基づく考究はもちろん、実際に雨香の警咳に接した人たちへの聞き取り調査も踏まえた労作で、雨香の生涯と著作について考える上で必須の基礎文献である。

その鈴木雨香の自撰漢文集が『雨香文集』である。『雨香文集』は自筆写本、全一冊。自家製と思われる原稿用紙47枚（表紙、裏表紙は除く）を袋とじにして冊子とする。毎半丁十行。表紙、裏表紙は共紙で、表紙左端に「雨香文集」と直接書き付ける。

47丁裏、「永楽園記」末尾に続く最終行に「大正八年八月立秋後数日 雨香撰」と見える。この日付が「永楽園記」のみに係るのか、文集全体の脱稿について言うのかは必ずしも明確ではないが、作品末尾に日付を入れた例としては他に「書三蔵和尚碑帖後」に「明治癸卯秋九月」とあるだけである。47丁末尾の一文は文集全体の脱稿について言うものと見て、『雨香文集』の成立は大正八年八月中旬頃と考えておく。なお、『雨香文集』を含む鈴木雨香関連の資料は旧所蔵者から岩沼市に寄贈され、現在、同市文化財課で「円通院寄贈資料」として管理される。

『雨香文集』は、書画、石、硯、篆刻などの文雅をめぐる仙台周辺の同志の輩とのやりとりを彷彿とさせる序や記、あるいは墓碑をはじめとする各種の碑銘、その他の伝、讀などの漢文作品計三十八編を収める。従来あまり光を当てられることがなかった、幕末から明治・大正期にかけて東北地方に生きた文人、知識人達の姿を具体的な事例として明らかにすることのできる、貴重かつ興味深い資料である。今後その調査および読解分析を通じて、雨香自身の人柄と文業に加えて、雨香とその周辺の文人、知識人との交流の具体相を浮かび上がらせたいと考える。この研究の基礎として、まず『雨香文集』を翻刻、紹介することから始めたい。

なお、前掲吉岡氏著『鈴木雨香の著作と岩沼』は全体がほぼ資料の影印と解説によって構成され、その中に『雨香文集』も含まれる。吉岡氏は『雨香文集』全文を影印で紹介した上で作品一編ごとに解説を付しているが、いずれも梗概を中心とした

簡潔な紹介に留まり、管見では解説中に誤解と思われる点もまま見受けられる。資料の読解分析において猶検討の余地が少なくない。また、原文は全て白文で句点すらなく、影印のままで読解しやすいものとは言えない。そもそも『鈴木雨香の著作と岩沼』自体が宮城県内の二、三の公共図書館に所蔵される以外には既に入手困難になっているということもある。本稿で改めて紹介、翻刻し、注釈を施す所以である。紙幅の都合上、上中下の三回に分けて翻刻する。翻刻の掲載をご快諾下さった岩沼市と関係各位に感謝を申し上げる。

なお注釈については、作品中に名の挙がる人物の伝をはじめ、現時点で未詳とせざるを得ないものも多い。その点を含め、翻刻や書き下し、注釈について広くご批評とご教示を乞う。

【凡例】

一、本稿では雨香鈴木省三の自撰漢文集である『雨香文集』を翻刻、紹介する。原本に目次はないが、三浦が作成し、通し番号を付したものを最初に掲げる。なお丁数には表紙を含まない。所収三十八篇のうち、今回は「1 愛天帖序」から「15 松本儀三郎墓誌銘」までを取り上げる。

一、原文は全て白文である。翻刻では句読点のみを補い、さらに読解の便宜をはかって書き下し文を付し、適宜注釈を施した。

一、一篇ごとに原漢文の翻刻、書き下し文、その注釈の順に掲

載する。

一、翻刻、書き下しを行うに際し、漢字の表記は原則として現在通行の字体を用いた。

一、くり返し記号には、原則として該当する漢字を当てて翻刻した。ただし、現在でもくり返し記号を用いるのが一般的な場合（「山々」「青々」など）には「々」を用いた。

一、原本では一部の作品中に、後補するつもりだったと思いが、空白のまま残された箇所がある。翻刻および書き下しでは、該当する字数分の□でこれを表記した。

一、敬意表現としての平出、台頭は翻刻に反映させなかった。

【雨香文集】目次

1	愛天帖序	1才	24	呈喫茶養生記物外老先生書	28才
2	左近桜碑	2才	25	檢泉日録序	30才
3	移蜺梅記	3才	26	松岡軍曹墓誌銘	32才
4	書三藏和尚碑帖後	3ウ	27	翠鳳菱沼君墓表	33才
5	狂石齋記	4才	28	陸軍歩兵上等兵斎新作墓表	34才
6	題道風觀蛙図	5ウ	29	奉告明治天皇陛下文	35才
7	小山田筑前君墓表	6才	30	藥師如来像龕背記	37才
8	小野木君墓誌銘	7才	31	栗山逸吟序	38才
9	休克日野翁伝贊	8才	32	岩沼旧邑主古内広行君墓表	39才
10	雨石印譜序	10才	33	謙堂横山先生墓誌銘	40ウ
11	天華道人雅号記	11才	34	平林莊記	42才
12	祭曾祖妣伊東氏文	12才	35	賀幽石禪師陞任曹洞宗大學教頭文	43才
13	祭先妣榮君蒲地氏文	12才	36	香茅園記	44ウ
14	貽孫卷序	14才	37	竹香園記	45ウ
15	松本儀三郎墓誌銘	15才	38	永楽園記	47才
16	記得小金華石図事	17才			
17	知非軒記	18才			
18	眼鏡塚記	19才			
19	黄葉村莊記	21才			
20	宮城野碑陰記	22ウ			
21	奉送菊重郎公子遊欧州序	贈家令作並清亮君			
22	菊庵吉田先生遺德碑	25才			
23	大尊壇碑	27才			

【翻刻】

1 愛天帖序

凡天下之至樂、莫樂於愛自然之物也。山之蒼々、水之決々、鳴禽之熙々、吟虫之唧々、与露花之艷美、霜葉之鮮麗、皆發自然於景色声韻之間者也。所以愛之樂之而不厭者、亦皆得無非存其自然之性情哉。是豈山水草木禽虫之属為然。左右珍玩、苟出於自然者、其愛樂之至味、与彼出於人工者不可同日而論也。余得自然研於入谷之溪、把玩不能措。益知天造妙趣可愛可樂也。研長五寸、巾三寸、厚一寸。右旁欹而直、左旁傾而斜。為不正長六稜形。蓋石片裂剥而成者、為水所激摩、備自然之妙趣也。世非無自然研而極少矣。研譜所載殆如不当其用者。栗山先生文、有自然研為中村某者。其為何形与当用否、皆不可得而知也。老友岡梧溪翁藏一枚。形如馬蹄稍可用。而余所得如有過無不及者是為当其用而有余耳。余已得此物雖銘之未定、發揮自然之妙趣也。於是請諸大家之詩文、將以為此物之重焉。夫文也詩也、人之性情也。性情人之自然也。以自然之性情詠自然之物。其金声玉振、何啻山水之清音、禽鳥之佳韻哉。即終為帖子自命以愛天謂愛自然之意也。余將携此帖与研、逍遙山水園林之間。聞禽声虫語觀露花霜葉、而有所得於自然之妙境、則實是諸大家之賜而由此研之靈也。

愛天帖の序

凡そ天下の至樂、自然の物を愛するより樂しきは莫し。山の蒼々たる、水の決々たる、鳴禽の熙々たる、吟虫の唧々たる、

露花の艷美たると、霜葉の鮮麗なると、皆な自然を景色声韻の間に発する者なり。之れを愛し之れを樂しみて厭はざる所以の者なり。亦た皆な其れ自然の性情を存するにあらざること無きことを得んや。是れ豈に山水草木禽虫の属のみ然りと為さん。左右珍玩するに、苟も自然に出づる者なれば、其の愛樂の至味、彼の人工に出づる者と、日を同じくして論ずべからず。余、自然研を入谷の溪に得て、把玩びて措く能はず。益々天造の妙趣の愛すべく樂しむべきことを知る。研の長さ五寸、巾三寸、厚さ一寸。右旁は欹けて直、左旁は傾きて斜なり。不正長六稜形を為す。蓋し石片の裂剥して成る者の、水の激摩する所と為りて自然の妙趣を備ふるなり。世に自然研無きにあらざるも極めて少なし。研譜に載する所、殆ど其の用に当たらざる者の如し。栗山先生の文に、自然研、中村某なる者有り。其の何の形なるやと用に当たるや否やと、皆な得て知るべからず。老友岡梧溪翁一枚を蔵す。形馬蹄の如く、稍用ふべし。而して余の得る所、過有るも及ばざること無き者の如し。是れ其の用に当たりにて余り有りと為すのみ。余、已に此の物を得て、銘の未だ定まらずと雖も、自然の妙趣を發揮す。是に於いて諸大家の詩文を讀ひ、將に以て此の物を重しと為さんとす。夫れ文や詩や、人の性情なり。性情は人の自然なり。自然の性情を以て自然の物を詠ず。其の金声玉振、何ぞ啻だ山水の清音、禽鳥の佳韻のみならんや。即ち終に帖子と為し、自ら命ずるに愛天を以てす。自然を愛するの意を謂ふなり。余、將に此の帖と研とを携へ、山水園林の間に逍遙せんとす。禽声虫語を聞き、露花霜葉を觀

て、自然の妙境に得る所有れば、則ち實に是れ諸大家の賜にし
て此の研の靈に由るなり。

*「決々」…水の深く広いさま。「照々」…やわらぎ楽しむ
さま。「唧々」…虫などのしきりに鳴くさま。「自然研」

…研は、硯。硯面（硯表）、硯側などに、石材を産出したと
きの石肌の趣を生かして作る。（宇野雪村『文房古玩事典
普及版』、柏美術出版、一九九三年）「入谷之溪」…現宮城
県本吉郡南三陸町入谷か。「研譜」…硯譜。名硯、佳硯の
図譜。「栗山先生」…儒者柴野栗山。一七三六～一八〇七。

寛政の三博士として著名。兩香の漢学の師。「文」は「栗山
先生文集』（全六卷五冊、天保十三年刊）か。「中村某」…
天保十三年板『栗山先生文集』巻五に「中村仲蓮天然硯銘」
がある。中村仲蓮については伝未詳。「岡梧溪」…岡台輔、
一八二一～一九〇〇。梧溪はその号。仙台藩士岡蔵治の子、
漢学者岡千仞の兄。好古家として知られる。（菊田定郷『仙
台人名大辞書』、同刊行会、一九三三年）「金声玉振」…初
めと終わりを全うし、智と徳の十分に備わること。ただし、
ここでは人の心を動かす美しい響きや音色を言うか。

2 左近桜碑

左近桜者旧岩沼邑主古内広直君所手植也。天保甲辰備見夫人嫁
楽山公也。君義父広賢君為迎輿使入京、君亦從焉。一日近衛公

賜宴於父子。君觀中庭有桜異尋常奇之。乞其苗移盆栽、歸植之
邸内調馬場。此地即是也。後時世一變為公園地、今属挹翠館。
余於君有主従之旧誼。因記其来由建石以存遺事。云。

種同紫宸 苗出藤氏 風流有人 齋婦千里
植之于庭 此地即是 六十年余 枝幹□□（二字分空白）
後春成春 非美却美 雪耶雲耶 霓裳可恥
其樹維存 其人已亡 今而不明 誰弁遺址
□□（二字分空白）蕪辭 以石換紙

左近の桜の碑

左近の桜は旧岩沼邑主古内広直君の手づから植うる所なり。天
保甲辰、備見夫人、楽山公に嫁す。君の義父広賢君、迎輿使と
して京に入り、君も亦た從ふ。一日、近衛公、宴を父子に賜ふ。
君、中庭に桜の尋常と異なるもの有るを觀て、之れを奇とす。
其の苗を乞ひ、盆に移し載せ、歸りて之れを邸内の調馬場に植
う。此の地即ち是れなり。後に時世一變して公園地となり、今
挹翠館に属す。余、君に於いて主従の旧誼有り。因りて其の来
由を記し、石を建て、以て遺事を存す。しか云ふ。

種は紫宸に同じく 苗は藤氏に出づ 風流を有する人 齋
し歸ること千里にして 之れを庭に植う 此の地即ち是れ
なり 六十年余にして 枝幹□□ 後春を春と成すは 美
にあらざれども却りて美 雪か雲か 霓裳も恥づべし 其
の樹は維れ存するも 其の人、已に亡し 今にして明らか
にせざれば 誰か遺址を弁ぜん □□蕪辭 石を以て紙に

換ふ

*「古内広直君」：岩沼邑主、古内氏第十一代、古内左近介広居。晩年に広直と改める。一八一九？。（『岩沼市史』、岩沼市、一九八四年）「天保甲辰」：天保十五年（一八四四）。なお、同年十二月二日に改元して弘化。「備見夫人」：伊達慶邦の正室、備見院備子。一八二八～一八五二。鷹司政照女、近衛忠熙養女。「樂山公」：仙台伊達氏第二十九代、伊達慶邦。一八二五～一八七四。（『仙台人名大辞書』）「義父広賢君」：古内氏第十代、古内弘見。広賢は諱。一八〇五～一八七五。（『仙台人名大辞書』）「近衛公」：備見院の養父、近衛忠熙。一八〇八～一八九八。「挹翠館」：明治に入って、桜ヶ岡公園（現仙台市西公園）に建てられた料亭の名。「種同紫宸」：宮中紫宸殿の南階下東側に植ええられる左近の桜と種を同じくすることを言うか。「藤氏」：近衛家は藤原北家嫡宗。「後春成春」：このあたり文章不明。桜が散った後、翌春の桜を待ち望む心は一見移り気と思えるので、戯れに「非美」と言うか。ただし大意として、六十年余にしてなお変わらぬ桜の美を称えることは動かない。「霓裳」：虹のように美しい裳。仙人の衣。

3 移蠟梅記

塩釜神祠側に蠟梅林。六無齋先生、所贈藤塚塩亭。初植之於其

別墅金華亭。後移祠側者也。亭址猶有遺株、鬱然成叢。今分一根移先生墓側、以倣植墓木之例。花之潔、香之冽、庶幾足以慰英靈乎。

蠟梅を移すの記

塩釜神祠の側に蠟梅の林有り。六無齋先生、藤塚塩亭に贈る所なり。初め之れを其の別墅金華亭に植う。後に祠の側に移す者なり。亭址猶ほ遺株有り、鬱然として叢を成す。今一根を分けて先生の墓の側に移し、以て墓木を植うるの例に倣ふ。花の潔きと、香の冽きと、庶幾はくは以て英靈を慰むるに足らんことを。

*「塩釜神祠」：塩釜神社。「六無齋先生」：六無齋は寛政の三奇人として知られる思想家、林子平（一七三八～一七九三）の号。雨香は『林子平伝記』を著している。「藤塚塩亭」：塩釜神社神官、藤塚式部。塩亭はその号。一七三七～一七九九。林子平と親しかった。（『仙台人名大辞書』）「別墅」：別荘。「植墓木之例」：「墓木已に拱す」（『春秋左氏伝』僖公三十二年）。

4 書三蔵和尚碑帖後

万里岡君見示唐本徐浩三蔵碑帖。余一見称善、熟視久之。君曰、子已称善。盍書其後。余辞之不許。即書曰、徐浩書筆力雄健、

与顔魯公伯仲。可以為楷法模範。蓋法北魏北齊者也。清阮芸台嘗論魯公書曰、出于北魏北齊來于歐楮北派、而非南朝二王派也。余以為至論。今見徐浩書与芸台所論無異。故暫假芸台所論、以塞其責質岡君。云。明治癸卯秋九月。

三藏和尚の碑帖の後に書す

万里岡君、唐本の徐浩の三藏碑帖を示さる。余、一見して善を称し、久しく之れを熟視す。君曰く、子已に善を称す。蓋^{なん}ぞ其の後に書せざると。余、之れを辞するも許さず。即ち書して曰く、徐浩の書、筆力雄健にして顔魯公と伯仲す。以て楷法の模範と為すべし。蓋し北魏北齊を法とする者なり。清の阮芸台、嘗て魯公の書を論じて曰く、北魏北齊に出て欧楮北派より来る。南朝二王の派にあらずと。余、以て至論と為す。今徐浩の書を見るに、芸台の論ずる所と異なること無し。故に暫く芸台の論ずる所を仮り、以て其の責を塞ぎて岡君に質す。しか云ふ。明治癸卯秋九月。

*「三藏和尚碑帖」：徐浩の書で、唐代中期の高僧不空三藏和尚（七〇五～七七四）を称えた碑文の拓本。「万里岡君」：儒者、岡麓^{がく}泉。一八五三～一九三一。梧溪岡台輔の長子。叔父千仞に学び、經史詩文をよくした。（『仙台人名大辞書』）「徐浩」：中国唐代の書家。七〇三～七八二。「顔魯公」：唐代の書家、顔真卿（七〇九～七八四？）のこと。「阮芸台」：中国清代の学者、阮元（一七六四～一八四九）。芸台

はその号。中国の書の流れを南北に二分し、金石資料に基づいて、古來書の模範とされてきた王羲之を中心とする南派の法帖は模刻を繰り返した結果真の姿を失っていると批判、金石文が伝える北派の書体を正統とした『南北書派論』『北碑南帖論』で知られる。（神田喜一郎『中国書道史』、岩波書店、一九八五年）「欧楮北派」：欧は欧陽詢（五五七～六四一）、楮は楮が正しく、楮遂良（五九六～六五八）のこと。いずれも中国唐代の書家。「南朝二王派」：二王は、王羲之、王献之父子のこと。共に中国六朝時代、東晋の書家。「明治癸卯」：明治三十六年（一九〇三）。

5 狂石齋記

老松蔽門、清流繞庭。其間有一茅亭。是為古山狂石、狂于石之处。進入其室則大小石塊、醜頑者、粗糙者、有角者、有稜者、如怒者、如嘖者、雜然紛堆。狂石怡然座其間、屹々磨琢不已。時間鏗々戛々之声、与松風之颯々、清流之淙々相和也。凡此等之石一經狂石之手、則醜頑者為美麗、粗糙者為滑沢、有稜角者為平滑、如怒嘖者為溫正。醜美精粗全變其性形。猶彼野人朴陋者漸閑礼節舉止詳雅与前日異者也。狂石之狂移其物如此。安知雜然紛堆之中有照乘之珍、他日為天下之巨宝哉。世之狂于石者、何限多狂其形。又只不過愛玩撫弄之耳。其狂也虛也。与妄粗為精、化賤為貴者、何啻霄壤矣。蓋狂石之狂狂之至者、而其狂也實也。宜乎以狂石名其室且自号也。抑余亦醜頑如石、朴陋一野

人、而仮狂石之一磨琢欲移其性者。交遊二十年、于茲而依然醜頑如旧。恥彼石者多矣。是与石之醜頑異而然乎。將為狂石所棄而然乎。嗚呼我知之。石之醜頑在其外形非其内質。故一磨琢則玲瓏滑潤非復前物也。余之醜頑内外形質皆無不然。雖經百磨琢終不能顯玲瓏滑潤之美也。狂石之狂無如之何耳。

狂石齋の記

老松門を蔽ひ、清流庭を繞る。其の間に一茅亭有り。是れ古山狂石、石に狂するの処なり。其の室に進み入れば則ち大小の石塊の醜頑なる者、粗糙なる者、角有る者、稜有る者、怒るが如き者、嘖むが如き者、雜然紛堆たり。狂石、怡然として其の間に座し、砑々と磨琢して已まず。時に鏗々々々の声、松風の颯々たる、清流の淙々たると相和するを聞く。凡そ此等の石、一たび狂石の手を経れば、則ち醜頑なる者は美麗になり、粗糙なる者は滑沢になり、稜角有る者は平滑になり、怒り嘖むが如き者は温正になる。醜美精粗、全く其の性・形を変ずるなり。猶ほ彼の野人の朴陋なる者、漸く礼節拳止を閑ひ、雅を諳らかにして前日と異なる者のごとし。狂石の狂、其の物を移すこと此くの如し。安くんぞ雜然紛堆たる中に照乗の珍有り、他日天下の巨宝となることを知るや。世の石に狂する者、何ぞ多く其の形に狂するに限る。又た只だ之れを愛玩撫弄するに過ぎざるのみ。其の狂や虚なり。粗を変じて精と為し、賤を化して貴と為す者と、何ぞ啻だ霄壤のみならんや。蓋し狂石の狂、狂の至れる者にして、其の狂や実なり。宜なるかな、狂石を以て其の

室の名とし、且つ自ら号するや。抑も余も亦た醜頑なること石の如き朴陋の一野人にして、狂石の一磨琢を仮りて其の性を移さんと欲する者なり。交遊すること二十年、茲に依然として醜頑なること旧の如し。彼の石に恥づる者多し。是れ石の醜頑と異にして然るか。將に狂石の棄つる所と為らんとして然るか。嗚呼、我之れを知る。石の醜頑、其の外形に在りて其の内質にあらず。故に一たび磨琢すれば則ち玲瓏滑潤にして復た前物にあらず。余の醜頑、内外形質皆不然らざること無し。百磨琢を経と雖も終に玲瓏滑潤の美を顯す能はず。狂石の狂も之れを如何ともすること無きのみ。

*「古山狂石」…美術家、古山通次。狂石はその号。一八五二—一九二六。《仙台人名大辞書》「嘖」…眉をひそめる。顔をしかめる。「紛堆」…ものが乱雑にうずたかく積まれた様。「怡然」…喜び楽しむ様。「砑々」…骨を折って働く様。「鏗々々々」…「鏗々」は金、石の鳴る音、「々々」は金、石など硬いものが触れ合う音の擬声語。「猶ほ野人朴陋者漸閑礼節拳止詳雅与前日異者也」…典拠未詳。「照乗之珍」…「照乗」は、中国戦国時代、魏の恵王が保有した宝玉。光が前後十二乗の車を照らすという。《史記》田敬仲完世家「照乗の珍」は、そのように珍しい宝物。「霄壤」…天地。また、天と地ほど差があることの譬え。雲泥の差。ここは後者。

6 道風觀蛙圖

一朝士烏帽直衣立柳下如有所視。是為小野道風觀蛙圖。蓋聞道風初書字甚拙學之而不得。一日過池辺時、雨新晴池水滿漲柳枝垂水。有蛙將上柳枝。飛騰者再三而不能。後又飛騰再三終能得上柳枝。道風見之感悟、以為吾字書字亦如此。爾後憤排刻苦、果成其志。終列三蹟、与嵯峨帝及佐理並称云。世間委身于學業而無成、半途廢者幾許也。千載之下豈不愧於道風哉。見此図者以道風之心為心則可也。

道風觀蛙の図に題す

一朝士、烏帽直衣にて柳下に立ち、視る所有るが如し。是れ小野道風蛙を觀るの図たり。蓋し聞く、道風初め書字甚だ拙く、之れを學ぶも得ず。一日、池邊を過る時、雨新たに晴れ、池水滿漲し、柳枝水に垂る。蛙の將に柳枝に上らんとするもの有り。飛騰すること再三にして能はず。後又た飛騰すること再三にして、次に終に能く柳枝に上ることを得。道風之れを見て感悟し、以為へらく、吾書字を學ぶも亦た此くの如しと。爾後、憤排刻苦し、果たして其の志成る。終に三蹟に列し、嵯峨帝及び佐理と並び称せらるると云ふ。世間、身を學業に委ねて成ること無く、半途にして廢する者幾許ぞ。千載の下、豈に道風に愧ぢざらんや。此の図を見る者、道風の心を以て心と為せば則ち可なり。

*「道風觀蛙圖」…小野道風は平安中期の書家。八九四〜九六四。道風が柳に飛びつく蛙を見て發憤するという話は淨瑠璃

『小野道風青柳硯』（一七五四年初演、のち歌舞伎でも上演）

二段目によって広く世に浸透し、画題にもなった。「憤排」…心中に憤ること。ここでは内心奮起する意。「三蹟」…小野道風は和様の書をよくし、藤原佐理、藤原行成と共に三蹟に数えられる。一方、嵯峨天皇は空海、橘逸勢と共に平安初期の書を代表する三筆に数えられる。ここでは両者が混同されている。

7 小山田筑前君墓表

大崎之役伊達氏之軍深入客地、戰甚苦。曾日暮天大雪。軍令小山田筑前頼定黑甲驪馬揮金旄進部兵奮戰而死。実天正十七年二月二日也。大崎氏之兵併其首与旗幟送之義隆陣。義隆以礼葬於中新田之南、建藥師堂以表。乃此地也。義隆送旗幟於最上氏報捷。義光固知頼定之驕名。因納於羽黑山云。頼定臨發謁貞山公。公賜金旄以昂之。軍中所執乃是也。安永中有里人役祐觀者。欲建碑而不果也。今片石謀不朽者亦繼祐觀之志也。

小山田筑前君墓表

大崎の役に伊達氏の軍深く客地に入り、戦に甚だ苦しむ。曾て日暮れ天大雪たり。軍令小山田筑前頼定、黑甲驪馬にて金旄を揮ひて部兵を進め、奮戦して死す。実天正十七年二月二日なり。大崎氏の兵、其の首と旗幟とを併せて之れを義隆の陣に送る。義隆、以て中新田の南に礼葬し、藥師堂を建て以て表す。

乃ち此の地なり。義隆、旗幟を最上氏に送り報ずること捷なり。すばや
義光、固より頼定の驕名を知る。因りて羽黒山に納むと云ふ。

頼定、発に臨みて貞山公に謁す。公、金旆を賜ひ、以て之れを賜はづます。軍中執る所乃ち是れなり。安水中、里人役祐観なる者有り。碑を建てんと欲するも果たさず。今片石もて不朽を謀る者も亦た祐観の志を継ぐなり。

*「小山田筑前君」…伊達家の武將、小山田筑前守頼定（一五二五—一五八八）。〔仙台人名大辞書〕「大崎の役」…天正十六年（一五八八）二月二日、伊達政宗が大崎家中の内紛に乗じてその領地を攻めた大崎合戦（『貞山公治家記録』巻三など）。文中に「天正十七年」とあるのは何に拠るか、不明。「部兵」…部隊に同じ。「義隆」…奥州探題大崎氏第十二代義隆（生没年未詳）。「最上氏」…出羽最上氏第十一代、山形藩初代藩主義光（一五四六—一六一四）。この頃、最上氏と大崎氏は同盟関係にあった。「驕名」…「驕」はおごり高ぶる意。「驕名」の誤か。だとすれば、武勇にすぐれるという評判。「貞山公」…仙台伊達氏十七代、仙台藩初代藩主政宗（一五六七—一六三六）。「金旆」…金色の指揮用の旗。「賜」…勅に同じ。「役祐観」…伝未詳。

8 小野木君墓誌銘

小野木君没越数月、將表其墓、介友人小川氏請余文。余素識君

父子誼、不可辭也。按君名已与吉。父曰多利治、母庄子氏。君其長子。幼好学、卓然有自立志。明治十八年、入宮城医学学校。校廃入第二高等学校医学部。二十四年、受医学全科卒業証書。二十五年、為帝國医科大学選科生專修外科。二十六年、為登米公立病院主席医員。二十八年、為第二師團備医。此年受医学得業士称号。二十九年六月、有海嘯之變、為氣仙沼赤十字社医員。此年官賞明治二十七八年戰役中功勞、賜金五十円。三十年二月、為赤十字社準備医員。十一月為志津川公立病院主席医員。有令名。三十一年三月二十一日、遽病没于志津川僑居。年僅三十。歸葬仙台瑞見寺。時曾有從軍記章之賜、而生前不得佩此賜。国手中目先生有許嫁其女之約而未及合壺而没。共是所以為遺憾也。銘曰、

秀而不夷 嗚呼傷哉 人惜其死 天棄此才

小野木君墓誌銘

小野木君没して数月を越え、將に其の墓に表せんとして、友人小川氏を介して余に文を請ふ。余、素より君の父子を識る誼あり、辞すべからず。按ずるに、君の名已与吉。父多利治、母庄子氏と曰ふ。君、其の長子たり。幼くして学を好み、卓然として自立の志有り。明治十八年、宮城医学学校に入る。校廃せられて第二高等学校医学部に入る。二十四年、医学全科卒業証書を受く。二十五年、帝國医科大学選科生と為り、外科を専修す。

二十六年、登米公立病院主席医員と為る。二十八年、第二師團備医と為る。此の年、医学得業士の称号を受く。二十九年六月、

海嘯の変有り、氣仙沼赤十字社医員と為る。此の年、官に明治二十七、八年の戦役中の功勞を賞せられ、金五十円を賜はる。三十年二月、赤十字社準備医員と為る。十一月、志津川公立病院主席医員と為る。令名有り。三十一年三月二十一日、（以下略）志津川の僑居に没す。年僅かに三十。仙台瑞見寺に歸葬す。時に曾て従軍記章の賜有りて、生前此の賜を佩くことを得ず。国手（以下略）中目先生、其の女を嫁するを許すの約有るも、未だ合（以下略）誓に及ばずして没す。共に是れ遺憾と為す所以なり。銘に曰く、

秀にして実らず 嗚呼傷ましきかな 人、其の死を惜しむ天、此の才を棄つ

*「小野木君」…この文に伝える以上のことは未詳。「父多利治」…整骨医、小野木多利治。一八四九～一九一七。（仙台人名大辞書）「得業士」…旧制高校の医学、法学、工学の四年制専門学部を卒業した者に授与された称号。「海嘯の変」…明治二十九年（一八九六）六月十五日の明治三陸地震による大津波。「明治二十七、八年之戦役」…日清戦争。「瑞見寺」…見瑞寺が正しい。現在も仙台市宮城野区榴ヶ岡にある。「国手」…医术や技芸に特に優れた手腕を持つ人。特に医者と呼ぶ敬称。「中目先生」…仙台藩藩医、中目斉。一八三五～一九二一。維新後は共立病院を創設、初代院長。（仙台人名大辞書）「合誓」…婚礼の意。「誓」は、さかずき。

9 休克日野翁伝贊

翁諱某、通称休克。初称良哲又貫的。小字栄吉。本姓藤本氏、父名栄十郎、志田郡石森村人也。翁其次子、以文化九年四月八日生。幼穎悟。其家業農。翁不屑之。自奮師事道仙百々氏学経史旁及医学。年十七、入錦織即休先生之門專学医術。前後十年先生与其偏名曰休克。業成爲日野量待養子。於是冒日野氏。初開業於石森村、次転牡鹿桃生諸地。後住玉造郡岩出山。其業大行。先配氏家氏、生三男二女。長男力園天。次男白号警村承家。三男竹之助嗣千葉氏。長女多称適鈴木氏。次女伊称適野村氏。繼配真山氏生一女天。翁性温恭質直、不与人争。謙讓守己儉薄安分。訓戒子弟以聖賢之道。晚年信仏入蓮宗、每遇宗祖忌日口絶腥臭。其謹嚴如此。而警村孝順好学修医学。応試及第、奉職宮城病院。移家仙台迎翁奉侍甚至。翁以明治十六年五月二十四日没于仙台小俣東裏丁之家。年七十二。遺言葬於荒町仏眼寺。今也警村其業行、家道亦興。前日之侍奉不嫌于心。作此画像日夕礼拜、以欲慰愛日之情也。使余贊之。余嘉追孝之志、作其伝係以贊詞曰、

行道以仏 修業以医 温恭之性 只旨仁慈 果然善報
生寧馨兒 孫謀悠遠 大有所貽 杏林永盛 花実満枝

休克日野翁伝贊

翁諱某、通称休克といふ。初め良哲、又た貫的を称す。小字栄吉。本姓藤本氏、父の名栄十郎、志田郡石森村の人なり。翁、其の次子にして文化九年四月八日を以て生まる。幼くして穎悟

たり。其の家、農を業とす。翁、之れを屑しとせず。自ら奮

ひて道仙百々氏に師事し、経史を学び、旁医学に及ぶ。年十七にして、錦織即休先生の門に入り、専ら医学を学ぶ。前後十年、先生其の偏名を与へ、休克と曰ふ。業成り、日野量待の養子となる。是に於いて日野氏を冒す。初め石森村に開業し、次いで牡鹿、桃生の諸地に転ず。後に玉造郡岩出山に住す。其の業大に行はる。先づ氏家氏を配し、三男二女を生む。長男力圃、夭す。次男白、磐村を号し、家を承く。三男竹之助、千葉氏を嗣ぐ。長女多称、鈴木氏に適く。次女伊称、野村氏に適く。繼いで真山氏を配し、一女を生むも夭す。翁、性温恭質直にして、人と争はず。謙讓して己を守り、儉薄にして分に安んず。子弟に訓戒するに聖賢の道を以てす。晚年仏を信じ、蓮宗に入る。宗祖の忌日に遇ふ毎に、口に腥臭を絶つ。其の謹嚴なると此くの如し。而して磐村、孝順にして、学を好み医学を修む。試に應じて及第し、宮城病院に奉職す。家を仙台に移し、翁を迎へて侍奉すること甚だ至れり。翁、明治十六年五月二十四日を以て仙台小俵東裏丁の家に没す。年七十二。遺言により荒町仏眼寺に葬る。今や磐村、其の業を行ひ、家道亦た興る。前日の侍奉心に慊らず。此の画像を作りて日夕礼拝し、以て愛日の情を慰めんと欲す。余をして之れに賛せしむ。余、追孝の志を嘉し、其の伝を作り、係いで賛詞を以て曰く、

道を行ふに仏を以てし 業を修むるに医を以てす 温恭の性 只だ仁慈を旨とす 果然として善報あり 寧馨児を生む 孫謀悠遠にして 大いに貽る所有り 杏林永く盛り

花実枝に満つ

*「休克日野翁」…この文に伝える以上のことは未詳。「道

仙百々氏」…伝未詳。「錦織即休先生」…仙台藩藩医、錦

織弘景。即休はその号。一七九五—一八六四。(「仙台人名大辞書」)「偏名」…二字の名前のうちの一字。「日野量待」

…伝未詳。「冒」…他家の姓を名乗る。「蓮宗」…日蓮

宗。「愛日」…寸暇を惜しんで孝行に励むこと。「追孝」

…亡き親に孝を尽くし、供養すること。「寧馨児」…幼少

から優れている人。神童。「孫謀」…子孫のためによいは

かりごとを残すこと。「厥の孫に謀を貽る」(「詩經」大雅

「文王有聲」)。「杏林」…医者的美称。ここでは日野休克、

磐村父子の繁栄の象徴。

10 雨石印譜序

余見古仏像有三面六臂持弓矢執劍戟如鬼物者。謂印度雖最古國豈有此鬼物哉。深自怪之。既而自解曰、是仏氏仮以顯古仏一身兼數能之意、不過論人耳。不足深怪也。而余今見之於人間界其人果誰乎也。吾友雨石画伯是也。画伯初為司直記室、有令名。又学画於雨谷翁伝其衣鉢。兼指頭画人稱其妙。誰知画伯多能。尚善鉄筆、使専門者瞠。若于其後然則画伯一隻手兼三四能。与彼印度古仏無異。謂一面四臂之鬼可也。頃日印譜成、來徵余言。因書所以自怪自解之事、以返之。或恐画伯之能更加三四為一面

八臂之鬼、余亦徴之於画伯之他日。云。

雨石印譜の序

余、古仏像の三面六臂にして弓矢を持ち、劍戟を執りて、鬼物の如き者有るを見る。謂ふに、印度最古の国なりと雖も豈に此の鬼物有らんやと。深く自ら之れを怪しむ。既にして自ら解きて曰く、是れ仏氏の仮に以て古仏一身に数能を兼ねるの意を顯し、人を諭すに過ぎず。深く怪しむに足らずと。而して余、今之れを人間界に見るに、其の人果たして誰ぞ。吾が友雨石画伯、是れなり。画伯初め司直の記室として令名有り。又た画を雨谷翁に学び、其の衣鉢を伝ふ。兼ねて指頭画は人、其の妙を称す。誰か画伯の多能なるを知らん。尚ほ鉄筆を善くし、専門者をして瞠らしむ。若し其の後にも然りとせば、則ち画伯一隻手に三、四能を兼ね。彼の印度の古仏と異なること無し。一面四臂の鬼と謂ひて可なり。頃日、印譜成り、来たりて余に言を徴む。因りて自ら怪しみ自ら解く所以の事を書し、以て之れに返す。或は恐る、画伯の能更に三、四を加へて一面八臂の鬼となり、余、亦た之れを画伯に徴めらるる他日のあらんことを。しか云ふ。

*「雨石画伯」…伝未詳。「記室」…書記。「雨谷翁」…画

人、川村雨谷。一八三八〜一九〇六。南画の大家。「指頭画」…小指の爪に墨を含ませ、時には指や手のひらも使つて描く絵画。「誰知画伯多能」…「誰不知画伯多能」として反語に解するべきか。「鉄筆」…印刻。篆刻。「印譜」…

雨石の手になる篆刻の印影を集めたものと思しいが、不明。

11 天華道人雅号記

我郷天華道人以書成家。曾參永平悟由老禪師受戒。禪師授法号曰曇瑞天華。因自号天華道人、求記於余。余時誦栗山先生詩。有「君去試看清洛上、風花雲月是我文」之句。打案曰是可記也。蓋道人之書得之天成之華乎。初其作字如風花雲月懸天、飄々紛々不可捕捉。其天真爛漫性情流路可驚可喜。是其得于天者也。然飄々紛々之性、則怪僻支離不能無走法度之外。於是乎、深自戒扼其奔逸之氣、抑其放縱之習、刻苦經營徐納之規矩繩墨之中。而逸氣充於内不溢、姿態形於外不媚。彼天真之美爛漫而至益致其美。是其成于華者也。是猶天馬蹴空奔逸不羈束者、得王良造父之控馭步趨整正、千里之駿骨。益可見也。天与華助道人之靈腕者如此。自今以後道人之書化為天華、將有盤旋大空、飄々紛々与風花雲月爭其美。下界人徒仰而望之矣。而後可謂禪師所名与道人所号相得而不悖。記以質道人。又望禪師于天之一方。

天華道人雅号の記

我が郷の天華道人、書を以て家を成す。曾て永平の悟由老禪師に参じて戒を受く。禪師、法号を授けて、曇瑞天華と曰ふ。因りて自ら天華道人を号し、記を余に求む。余、時に栗山先生の詩を誦す。「君去りて試みに看よ清洛の上、風花雲月是れ我が文」の句有り。打案じて曰く、是れ記とすべきなりと。蓋し道人の

書、之れを天に得て、之れを華と成すものか。初め其の字を作すに風花雲月の天に懸かるが如く、飄々紛々として捕捉すべからず。其の天真爛漫の性情の流露すること、驚くべく、喜ぶべし。是れ其れ天に得る者なり。然るに飄々紛々の性なれば、則ち怪僻支離にして法度の外に走ること無きこと能はず。是に於いてか、深く自戒して其の奔逸の氣を扼し、其の放縱の習ひを抑へ、刻苦經營して徐に之れを規矩繩墨の中に納む。而も逸氣内に充ちて溢れず、姿態外に形れて媚びず。彼の天真の美、爛漫にして益々その美を致すに至る。是れ其れ華と成す者なり。是れ猶ほ天馬の空を蹴り、奔逸にして羈束せられざる者の、王良・造父の控馭を得て步趨整正し、千里の駿骨となるがごとし。益々見るべきなり。天の華を与へて道人の靈腕を助くること此くの如し。自今以後、道人の書、化して天華と為り、將に盤旋して大空に有り、飄々紛々として風花雲月と其の美を争はんとす。下界の人、徒だ仰ぎて之れを望むのみ。而して後、禪師の名づくる所と道人の号する所、相得て悖らずと謂ふべし。記して以て道人に質す。又た禪師を天の一方に望む。

*「天華道人」…伝未詳。「永平」…曹洞宗大本山永平寺。

「悟由老禪師」…永平寺六十四世貫首、森田悟由。一八三四

（一九一五。明治仏教界の泰斗として仰がれたという。〔禪

学大辞典〕、大修館書店、一九七八年）「栗山先生」…前出

儒者柴野栗山。「君去試看清洛上、風花雲月是我文之句」

…栗山は詩名も高いが、中でも人口に膾炙した「答人求旧

草」中の詩句。以前に作った詩を見たいと求められた栗山が、それは風が吹き飛ばしてしまつた、都の空を見よ、天に懸かる風花雲月は私の詩句のかけらなのだと洒脱に答えたもの。「王良・造父」…よく馬を御する者の代表。「故に王良・造父は天下の善く御する者なり。」「韓非子」外儲說右下）「控馭」…控御。馬を御すること。巧みに扱うこと。「駿骨」…駿馬に同じ。「盤旋」…ぐるぐると巡る。「飄々紛々」…「飄々」は風に吹かれてひるがえり上がる様、「紛々」は様々に混じり乱れる様。

12 祭曾祖妣伊東氏文

維時明治四十二年四月五日、適以当陰曆閏二月旬五之日。茲恭修曾祖妣君伊東氏百年忌辰之法会。謹供時差、告之以文曰、曾祖父成意君、謹厚励精家道大興。雖由力学之厚、修業之篤、亦未曾不由曾祖妣君内助之功也。遺訓今存、孫謀是貽。省三不肖謾辱家嗣。供具饒豐宜厚祭事、特就簡單聊薦饌食亦從家規。追遠微志。在天尊靈冀照我誠彷彿來格尚饗。

曾祖妣伊東氏を祭る文

維れ、時に明治四十二年四月五日、適以て陰曆閏二月旬五の日に当たる。茲に恭しく曾祖妣君伊東氏の百年忌辰の法会を修む。謹んで時差を供へ、之れに告ぐるに文を以て曰く、曾祖父成意君、謹厚励精にして家道大いに興る。力学の厚きと修業

の篤きに由ると雖も、亦た未だ曾て曾祖妣君の内助の功に由らずんばあらず。遺訓今に存し、孫謀是れを貽^{おく}る。省三不肖にして謾に家嗣を辱^{なや}くす。供具饒豊にして、宜しく祭事を厚くすべきに、特に簡単に就いて聊か饌食を薦むるも亦た家規に従ふ。追遠の微志あり。天に在す尊靈、冀^{うが}はくは我が誠を照らして彷彿として来格し、尚ほ饗せられんことを。

*「曾祖妣君」…亡き曾祖母に対する敬称。「妣」は亡き母の意。「孫謀是貽」…前出「詩經」大雅「文王有声」の一節による。子孫によいはかりごとを遺すこと。「時羞」…季節の食物を祭祀に備えること。「追遠」…祖先を思いしのぶ。祖先の祭事を丁寧に行う。「来格」…祭祀に亡き人の靈が来たり至る。

13 祭先妣榮君蒲地氏文

嗚呼、尊妣君当先君多病不見事内外一身經營家事、鞠育不肖等同胞三人。既而先君即世也、寡居簪々艱難備。嘗未幾有戊辰之變。被収家祿五分之四、頓減歲入。時不肖年僅志學。雖當家嗣未能治家事。尊妣千辛万苦、使不至不肖同胞三人不飢不凍者、実由尊妣之慈恩也。不肖稍長、尊妣戒曰、汝不継箕裘之業則不孝也。宜憤悱而修家學。不肖感憤辭膝下東西遊學。為共立病院医員、或在于登米、或在于古川。後選為院費医學生、入東京大學医学部。未半年尊妣即世。訃至京寓、五内為裂。廐學三日以

為、苦學欠定省之務者在欲修學業報慈恩耳。今也其人亡矣。修學果為誰乎。已而自悟曰、廐學亦背遺訓也。不若卒業帰郷掃其墓慰尊妣在天之靈。學成東帰任官医校及病院。而不能為甘旨之奉於尊妣生前者、實不堪遺憾也。每一念至于此、未曾不流涕嗚咽也。今茲值三十三年忌辰、乃会親族与尊妣声息相及者謹奉粗饌、表追遠之誠。尊妣在天之靈彷彿而來饗。

先妣榮君蒲地氏を祭る文

嗚呼、尊妣君、先君の多病なるに当たり、事の内外を見ず一身に家事を経営し、不肖等同胞三人を鞠育す。既にして先君即世するや、寡居し、簪々として艱難に備ふ。嘗て未だ幾ばくならざるに戊辰の變有り。家祿五分之四を取められ、頓に歳入を減ず。時に不肖、年僅かに志學なり。家嗣に当たると雖も未だ家事を治むること能はず。尊妣千辛万苦して至らざる不肖ら同胞三人をして飢えず凍えざらしむるは、実に尊妣の慈恩に由るなり。不肖稍長するに、尊妣戒めて曰く、汝、箕裘の業を継がざれば則ち不孝なり。宜しく憤悱して家學を修むべしと。不肖感憤して膝下を辭し、東西に遊學す。共立病院医員と為り、或は登米に在り、或は古川に在り。後に選ばれて院費医學生と為り、東京大學医学部に入る。未だ半年ならずして尊妣即世す。訃京寓に至り、五内裂かる。學を廐すること三日にして以為へらく、苦學して定省の務めを欠くは、學業を修め慈恩に報ひんと欲するに在るのみ。今や其の人亡し。學を修むるとも果たして誰が為ぞ。已にして自ら悟りて曰く、學を廐するも亦た遺訓に背く

なり。卒業し帰郷して其の墓を掃き、尊妣在天の靈を慰むるに若かずと。学成り東歸して医校及び病院に任官せらる。甘旨の奉を尊妣生前に於いて為すこと能はざるは、実に遺憾に堪えず。一念の此に至る毎に未だ曾て流涕嗚咽せずんばあらず。今茲に三十三年忌辰に値ひ、乃ち親族と尊妣の声息相及ぶ者と会して謹んで粗饌を奉り、追遠の誠を表す。尊妣在天の靈、彷彿として来たり、饗せられよ。

*「尊妣君」…亡き母に対する敬称。「鞠育」…養育に同じ。

「即世」…亡くなること。「榮々」…孤独で頼るところのない様。

「戊辰之變」…慶応四年・明治元年（一八六八）の戊辰戦争。「志学」…十五歳。「十有五にして学に志す」〔論語〕為政。「箕裘之業」…父の遺業、家業。「良治の子は必ず裘を為るを学び、良弓の子は必ず箕を為るを学ぶ。」〔礼記〕学記。「五内為裂」…「五内」は五臓。断腸の思い。「定省之務」…側近く親に仕えて、晩にはその寝具を安らかに整え、朝にはその安否を伺う。子のなすべき務め〔礼記〕曲礼上。「甘旨之奉」…美味しい酒食を親に供すること。「追遠」…前出。祖先の祭事を丁寧に行う。

14 貽孫卷序

我友相原君輯自明治初年至今所受叙任、辞令、及賞状、謝状、以為一卷、求題名於余。余謂、詩云貽厥孫謀、是可以名也。乃

命以貽孫且序之曰、世之貽子孫者何限或以名譽或以賞財。而貽名譽者不能貽賞財、貽賞財者不能貽名譽。難矣哉、貽其子孫也。其能兼此者惟相原君乎。君少小長吏務、初為岩沼村長、後為岩沼郵便電信局長。四十余年間始終一貫致恪勤之誠。辞令之所下名譽隨之。名譽之所在賞財隨之也。嗚呼、亦幸矣。顧今之在公職者、達於事務則欠誠実、有誠実者則迂於事務。君既無此失。悠々歲月能全其職。可不謂良吏乎哉。子孫受此貽者、能以君之心為心則家道之隆当与君名声無窮矣。是君之所以貽此卷而余之所以序此卷也。

貽孫卷の序

我が友相原君、明治初年より今に至り、受くるところの叙任、辞令、及び賞状、謝状を輯めて以て一卷と為し、題名を余に求む。余謂はく、『詩』に「厥の孫に謀を貽る」と云ふ、是れ以て名とすべきなりと。乃ち命ずるに貽孫を以てし、且つ之れに序して曰く、世の子孫に貽る者、何ぞ或ひは名譽を以てし、或ひは賞財を以てするに限る。而して名譽を貽る者は賞財を貽ること能はず、賞財を貽る者は名譽を貽ること能はず。難きかな、其の子孫に貽るや。其れ能く此れを兼ねる者、惟だ相原君のみか。君、少小にして吏務に長じ、初め岩沼村長と為り、後に岩沼郵便電信局長と為る。四十余年間始終一貫して恪勤の誠を致す。辞令の下る所、名譽之れに隨ふ。名譽の在る所、賞財之れに従ふ。嗚呼、亦た幸ひなるかな。今の公職に在る者を顧みるに、事務に達すれば則ち誠実に欠け、誠実有る者は則ち事

務に迂たり。君、既に此の失無し。悠々として、歲月能く其の職を全うす。良吏と謂はざるべけんや。子孫の此の貽を受くる者、能く君の心を以て心と為せば、則ち家道の隆、当に君の名声と^{とも}に無窮たるべし。是れ君の此の巻を貽る所以にして、余の此の巻に序する所以なり。

*「相原君」…この文に伝える以上のことは未詳。「詩云貽厥孫謀」…前出、『詩經』大雅「文王有声」中の詩句。子孫のためにいはいはかりごとを残す。「恪勤」…職務につつま務めること。精勤。

15 松本儀三郎墓誌銘

君諱俊秀、字惟一、通称儀三郎、号鹿洲又好山。考名晋一郎、妣佐藤氏。君其長子。幼穎悟好学。初受句読于家叔春塘翁、後受經史于亘理日就館学頭佐野竹斎翁、受書学于吉田菊庵翁。皆入其堂奥。年少成器一鄉屬望。明治十三年、為宮城県會議員、尋為常置委員。二十七年、為亘理郡會議員、又為其議長。鞠躬参与者殆四十年也。鹿島小学校之創立在明治初年。村民未知小学校為何物。君率先出資示其範。成一新校舍規模宏壯、地方所未曾有者。人呼称松本学校云。致其力於公共事業概如此。二十七年以來銳意治産勤儉力行。不数年而家資倍蓰先代。又設造酒所於仙台、日致隆盛。君常嘆曰、方今屋材焚料需用多供給不足。人唯知濫伐之、不講補足之道。前途可憂。於是孜孜經營山林、

將益張其業。不幸臥病五日而歿。實大正二年六月十八日也。距生安政元年三月十三日、得年六十。君狀貌秀偉、性行端嚴、才識明達、沈毅寡默、处事不苟。其議事音吐高朗、言語明晰、剖解条理巨細不遺。平素弊衣破帽、一見如田舍翁。大小家事躬自弁此。人將不堪其煩、君怡然居之。笑曰、今也人事益加煩。不数年而將做我所為耳。凡日常行事雖如不得一身之閑、好愛書画、最富鑑識。其作字運筆自在揮灑縱橫、以応其需。綽々存余裕、殆如世外之人。蓋如君可謂華實兼全也。及聞其訃、知与不知無不哀惜也。葬於常因寺先塋之次。法諡曰、松喬院天倫良儀惟一居士。配佐藤氏、生子女六人。長子健吉承家。次子信吾為医。三子泰平病歿。四子秀治監仙台別邸。五子良治在中学。長女伊智適角田竹谷氏。余不惟与君為同窓友人、於書画文墨為同好。墓銘之任寧可辭哉。君少於余一歲、自少長言之則君逝当後於余。而君却先於余。嗚呼、命哉。泫然攬淚作銘。銘曰、

至誠議事 為公為民 勤儉治産 潤屋潤身 維功無朽
維德有隣 鵲嶺之下 逢水之浜 深銘員石 磨而不磷

松本儀三郎墓誌銘

君諱俊秀、字惟一、通称儀三郎、鹿洲、又た好山を号す。考の名晋一郎、妣佐藤氏。君は其の長子たり。幼きより穎悟にして学を好む。初め句読を家叔春塘翁に受く。後に經史を亘理日就館学頭佐野竹斎翁に受け、書学を吉田菊庵翁に受く。皆な其の堂奥に入る。年少にして器を成し、一鄉屬望す。明治十三年、宮城県會議員と為り、尋^{ついで}で常置委員と為る。二十七年、亘理郡

會議員と爲り、又た其の議長と爲る。鞠躬して参与する者、殆ど四十年なり。鹿島小学校の創立、明治初年に在り。村民未だ小学校の何物なるかを知らず。君率先して出資し、其の範を示す。一新成り、校舎の規模宏壮にして、地方に未だ曾て有らざる所の者なり。人呼びて松本学校と称すと云ふ。其の力を公共事業に致すこと概ね此くの如し。二十七年以来、銳意治産に勤儉力行す。数年ならずして、家資、先代に倍蓰す。又た造酒所を仙台に設け、日に隆盛を致す。君、常に嘆じて曰く、方に今、屋材燃料需用多く供給足らず。人唯だ之れを濫用することを知らるのみ、補足の道を講ぜず。前途憂ふべしと。是に於いて孜孜として山林を經營し、將に益々其の業を張げんとす。不幸にして病に臥し、五日にして歿す。實に大正二年六月十八日なり。安政元年三月十三日に生まるるを距て、年六十を得。君状貌秀偉、性行端嚴、才識明達、沈毅寡黙にして、事を処するに苟にせず。其の議事、音吐高朗、言語明晰、条理を剖解すること巨細にして遺さず。平素より弊衣破帽にして、一見田舎翁の如し。大小家事躬自ら此れを弁ず。人、將に其の煩に堪へざらんとするも、君、怡然として之れに居る。笑ひて曰く、今や人事益々煩を加ふ。数年ならずして將に我が爲す所に倣はんとするのみと。凡そ日常の行事、一身の閑を得ざるが如しと雖も、書画を好み愛して、最も鑑識に富む。其の字を作すや、運筆自在にして縦横に揮灑し、以て其の需めに応ず。綽々として余裕を存し、殆ど世外の人の如し。蓋し君の如きは華実兼全と謂ふべし。其の計を聞くに及び、知ると知らざると哀惜せざること

無し。常因寺の先塋の次に葬る。法諡を松喬院天倫良儀惟一居士と曰ふ。佐藤氏を配し、子女六人を生む。長子健吉、家を承く。次子信吾、医と爲る。三子泰平、病没す。四子秀治、仙台別邸に監たり。五子良治、中学に在り。長女伊智、角田竹谷氏に適く。余、惟だ君と同窓の友人たるのみならず、書画文墨に於いて同好たり。墓銘の任、寧くんぞ辞すべけんや。君、余より少きこと一歳、少長より之れを言へば、則ち君の逝くは当に余より後なるべし。而して君、却りて余より先んず。嗚呼、命なるかな。泫然として涙を攬り、銘を作す。銘に曰く、

至誠の議事は 公の爲 民の爲なり 勤儉として治産し 屋を潤し身を潤す 維の功、朽ちること無く 維の徳、隣り有り 鵲嶺の下 逢水の浜 深く貝石に銘す 磨して磷とならず

*「松本儀三郎」…宮城県會議員、一八五四—一九一三。(「仙台人名大辞書」)「考」…亡き父。先考。「春塘翁」…亘理邑主伊達氏の医臣、松本俊燾。春塘はその号。一八三七—一九〇八。(「仙台人名大辞書」)「亘理日就館」…亘理邑主伊達氏が作った学問所。「佐野竹斎」…日就館学頭であつた以上のことは未詳。「吉田菊庵」…岩沼邑主古内氏の家子、吉田豊仙(また、旭とも)。菊庵はその号。一八〇五—一八七八。市川米庵に学び、書をよくした。(「仙台人名大辞書」)なお、次回に紹介する「22菊庵吉田先生遺徳碑」参照。「堂奥」…学問などの奥深いところ。奥義。「鞠躬」…尽力

する。「倍徙」：倍增、五倍增する。「徙」は五倍するの意。「沈毅」：冷静沈着で物事に動じない。「揮灑」：筆をふるい、墨をそそぐ。書画を書く意。「先塋」：祖先の墓地。「泫然」：涙をこぼして泣くさま。「攬淚」：落涙を手でぬぐい取る。「維德有隣」：德のある者は孤立することなく、必ず共鳴する人が現れる。「德孤ならず必ず隣有り」(『論語』里仁)。「鴉嶺」：現宮城県亘理郡亘理町にある烏鳥屋山か。「逢水」：逢隈の地を流れる川、すなわち阿武隈川を言うか。松本は亘理郡逢隈村(現宮城県亘理郡亘理町)出身で、その地を阿武隈川が流れる。「員石」：圓(円)石に同じ。丸い石、ここでは墓石。「磷」：石がすり減らされて薄くなること。